

中口国境の街で

● 放 眼 日 中



これまで行った所で一番寒かったのはモンゴルのウランバートル、3月でも零下22度だった。今回はこの記録を打ち破ろう? と、中国黒龍江省の最北端と東端を訪ねてみた。東の端、撫遠までハルピンから列車で17時間、撫遠駅は最近できたばかりで真新しく、以前はここまで鉄道は繋がっていなかった。まさに中国の東の果てである。

そんな辺境であるが、黒龍江とウスリー江の対岸はロシア領、ハバロフスクまでは60キロ、河を船で行けば1時間ほどの距離となる。さぞや国境貿易などで栄えているのかと思いきや、人口の少ない何もない街だった。ただ青い空、真っ白な雪、きれいに凍った河、新鮮な空気に、同行した中国入学者が「一体何年ぶりにこんな空を見ただろう」と思い切り深呼吸する様子が、今の中国の環境

問題の深刻さをうかがわせた。

ウスリー江を挟んで対岸はロシアという街、「抓吉鎮」と名付けられた小さな村を通り過ぎようとした時、河で魚釣りをした跡を見つけ興味を持った。しかし村を歩いても人の気配はなく、零下20度の寒空の下、寂しさとらわれた。その時、向こうからお婆さんと幼児がやってきた。話し掛けてみると、家の中へ入らな

いかと誘われる。77歳だというその老婆は1950年代に山東省からこの辺境の地へやってきて以来、50余年をここで過ごしていた。5人の子供に恵まれ、孫もおり、連れていた幼児はひ孫だった。家の中はお世辞にも立派とは言えなかったが、ハルピンなどの都会では既に見られなくなった大鍋が真ん中に鎮座し、煮炊きの熱で家中を暖める設備が目を惹いた。生計はウ

スリー江での魚捕りで賄っているという。

「私はね、ここに来てからずっと共産党に感謝しているんだよ」。老婆が発したこの言葉は衝撃的だった。これまで何百、何千という中国人に会ってきたが、共産党に心から感謝する言葉など聞いたことはなかった。「76年に大火災で家を焼かれた時も、一昨年の大洪水で被害を受けた時も、党がわれわれの家を建ててくれたんだ」

一方、中国最北端の街、漠河へも行った。この街も中国の今の繁栄とは無縁の場所だった。ここでは零下37度の寒さを体験、万全の寒さ対策にもかかわらず、危うく凍傷になりそうになり、北国に生きることの厳しさを肌で感じた。北極圏の村といういわばある種の「テーマパーク」で、何も無いロシア国境を眺めながら、



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

内モンゴルから移住しここで林業を東erner中国人が言った言葉も忘れない。「俺たちはここに生きていくだけで国に貢献しているんだ」

われわれ日本人は陸路の国境がイメージしにくい。モンゴルとロシアの国境に行った時も全く同じ話が出たが、「膨大な国境線を全て守ることなど無理なのだ。一番良いのはそこに人が住むこと。それが国土の守りとなる」。「実効支配」などと言葉では簡単に言うが、そこには多くのストーリーがある。

あの老婆の家が建てられたのも国の政策なのだろう。そういうば村の名前は「抓吉鎮」、意味は「吉をつかむ村」だ。彼女は決して平穏ではなかったこの国で、幸せをつかんだ人なのかもしれない。